

審査の結果の要旨

氏名 大塚 類

本論文は、或る児童養護施設において、「根なし草」という在り方をしている子どもの意識や他者関係とその変化とを、フッサールの相互主観性理論に基づき、筆者自身の事例に即して明らかにしている。他者経験に関するフッサール以後の現象学の成果をも射程に入れながらの理論的考察と日常の場面における事例の解明は、相互に補完し合っており、他者関係に大きな問題を抱える子どもの在り方に即した、極めて質の高い労作である。

第Ⅰ部では、人生初期の子どもと養育者との関係についての先行研究が概観され、子どもの意識を現象学に基づいて解明することの意義と必要性とが示される。そのうえで、一方向的な感情移入と浸透的な感情移入という他者理解の二つの在り方と、匿名的な他者との共同主観という、本論文の中心的な観点が考察される。第Ⅱ部では、「根なし草」という在り方をしている子どもとそうではない子どもの在り方がまず対比的に描かれる。そのうえで、他者関係の在り方に「脆さ」を備えている或る子どもの事例に即し、「根なし草」という在り方を基づけている意識が明らかにされ、第Ⅲ部での事例研究の基盤が提示される。

第Ⅲ部は、三人の子どもの事例研究にあてられる。一つ目では、幼児期を経て児童期に入り、他者への乱暴な振る舞いが顕著となり、一方向的な感情移入によって他者を理解していた子どもが、養育者に抱きつく等のかなり強い身体接触を介して、浸透的な感情移入により他者を理解できるようになるまでの6年間の過程が明らかにされる。二つ目では、自分と他者の行為を重ね合わせる相互共在から、特に他者の痛みや感情を一方向的な感情移入によって捉える時期を経て、浸透的な感情移入による他者理解へと到るまでの、子どもの意識の3年間の変化が明らかにされる。三つ目においては、表情や語彙に乏しく自分の想いを発散させるだけの幼児期から、自分の願いを他者に実現してもらうことによる顕在的な他者との結合を生きるようになり、児童期になると匿名的な他者との共同主観となるまでの子どもの6年間の意識の在り方が解明される。と同時に、自分は誰にとっても特別な存在ではない、という在り方に直面せざるをえない、児童養護施設の子どもたち一般の在り方が導かれ、こうした子どもへの養育の意義が再考される。

各事例場面における子どもの意識に一貫して定位することにより、いわゆる「問題行動」とみなされてしまう子どもの他者関係を、潜在的な次元における意識の在り方の「脆さ」と世界の不安定さにまで遡及しつつ、克明に描き出した本事例研究は、現実の個々の他者関係を可能ならしめている意識の在り方をも明らかにしている。この解明により、本論文は、潜在的な他者意識に基づく顕在的な他者経験を解明している相互主観性理論そのものの再検討を促すものとなっている。さらには、発達心理学等の経験科学において当然視されている母子融合から母子分離といった子どもの発達観や、養育環境と子どもの発達との関係についての新たな観点を提起するものともなっている。以上のことから、本論文は、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。